



桜馬場2丁目自治会だより

命を守る
住宅用火災警報器
設置してありますか？点検してありますか？

10年経ったら交換を！

九州一斉 住宅用火災警報器普及啓発キャンペーン実施中！

すべての住宅に住宅用火災警報器が義務付けられた平成21年6月1日から**10年**を超えています。

※ 住宅用火災警報器は、古くなると電子部品の寿命や電池切れなどで火災を検知なくなることがありますので、機器本体を取り替えましょう。

■設置する場所(例)

設置が必要な場所は、寝室・階段等※です。

※階段は、寝室が2階以上にある場合に必要です。

■点検方法

ひもを引っ張ったり、ボタンを長押しすると、音声などで正常に作動するかどうかを知らせてくれます。

伊良林校区連合自治会
ラジオ体操講習会
令和4年7月9日(土) 10:00
会場 ふれあいセンター



6月名画鑑賞会
日時 6月26日(日)
会場 桜馬場公民館
題名 アラビアのロレンス
時間 13:00~16:45
(207分、3時間45分)

頭の体操

5月号の答え
①塘嵩 =セロリ ②水雲 =もずく
③蚕豆 =そらまめ ④早芹菜 =パセリ

の文字を組み合わせて出来る漢字は??

青
↓
初 → □ → 分
↓
雨

籠
↑
雑 → □ ← 人
↑
生

5月資源物回収実績

	当月 (前月)
新聞	650K (550K)
雑誌	580K (480K)
ダンボール	780K (550K)
アルミ缶	40K (30K)
総計	2,050K (1,610K)

今月は子ども会も協力してくれました。おかげで2トン突破！ありがとうございました。。
今月は6月25日(土) 8時からです。

2023年のシーボルト渡来200周年によせて

長崎史談会 会員 宮坂正英

オランダ商館長ヤン・コック・フロムホムが記した日記の1822年8月12日、火曜日の項に「11時に私は、私の後任者スチュレル氏、およびその他の紳士たちと上陸し、その場で全職員と乗組員と日本人の祝賀を受けた」（オランダ商館長日記第10巻）とある。爾来この日がドイツ人医師で出島オランダ商館付医師として来日したフィリップ・フランク・フォン・シーボルト（1796-1866）が長崎の地に足を踏み入れた記念の日となっている。

今から98年前の1924年（大正13）4月27日には鳴滝のシーボルト宅跡でシーボルト渡来100周年を記念する大規模な祝賀会が開催された。大会委員長の平岡広義長崎県知事のもとオランダ公使、ドイツ代理大使、内務省書記官、文部大臣秘書官などの各国政府代表をはじめ、東京、京都、九州帝大教授らの学術関係者も列席。総勢約400名という盛大な催しになった。

この祝賀会は、もともと渡来100周年である1923年（大正12）に開催する予定であったが、関東大震災のため1年延期になった。この祝賀会のために長崎ではすでに宅跡にシーボルトの胸像が建てられ、除幕式も1923年11月11日に挙行されていた。

記念式典の前年の1922年（大正11）には内務省の告示により高島秋帆旧宅や出島和蘭商館跡と並んで鳴滝のシーボルト宅跡が国指定の史跡となり、長崎でもシーボルトの業績を顕彰する機運が高まっていた。

周知のとおり、1989年（平成元）には長年の懸案であったシーボルトの業績を顕彰するシーボルト記念館が鳴滝の

シーボルト宅跡に隣接する場所に建設され、シーボルトの紹介と研究調査の中心地として活発に活動している。

それから幾星霜を経て来年はシーボルトが長崎に来航して200年目にあたる。この間、長崎をはじめ全国各地でシーボルトをめぐる研究会や展覧会が開催され、今もなお多くの人々の関心を集めている。シーボルト自身の生涯と業績の更なる研究にとどまらず、シーボルトが収集した日本の動植物や生活文化資料などは現在を生きる私たちにとっても過去を知るためのかけがえのない資料として再評価されつつある。

長崎で研究生活を30年あまり続けることができた筆者としても、この渡来200周年の記念の年に微力ながら貢献したいと考えている。その一つが「鳴滝塾」の再考である。鳴滝塾はシーボルトが西洋人として初めて出島外に創設した学塾で、日本人が直接最新の西洋医学や自然科学を学習することが可能な場であったが、その組織や学習方法についてはシーボルト事件の影響からかほとんど残されておらず、詳細は不明のままである。

そこで、この30年間解読整理に当たってきたドイツ在住のシーボルトの末裔であるフォン・ブランデンシュタイン家が所蔵するシーボルト関係文書の中からシーボルトの長崎での医学教育や鳴滝塾に関連すると思われる資料を抽出して解読することを目下の課題としている。

シーボルトは長崎からベルリン大学医学部の教授を務めていた叔父のアダム・エリアス・フォン・シーボルトに「いま鳴滝という長崎郊外の狭い谷あいから、日本中に科学の光

が差し始めています」と書き送っている。渡来200周年を迎える2023年には様々なイベントを通じて、長崎がまさに日本における西洋近代科学発祥の地であったことを国内外に知らしめることを目標にしたい。

「鳴滝のシーボルト宅跡で行われた、シーボルト渡来100周年記念式典（1924年）」

左の写真は（シーボルト記念館『鳴滝紀要』第2号より複写）

*本稿は長崎史談会原田会長、及び本会会員長崎純心大学客員教授の掲載承認を頂いています。

